

### \*10m パラボラ太陽電波赤道儀望遠鏡跡地に案内看板設置

現在、国立天文台構内には電波望遠鏡の痕跡を思わせるものは皆無といってよい。東京天文台（国立天文台の前身の一部）の電波観測は、畑中武夫先生らによってはじめられた。その最初の頃の電波望遠鏡の写真が残っている（写真1）。

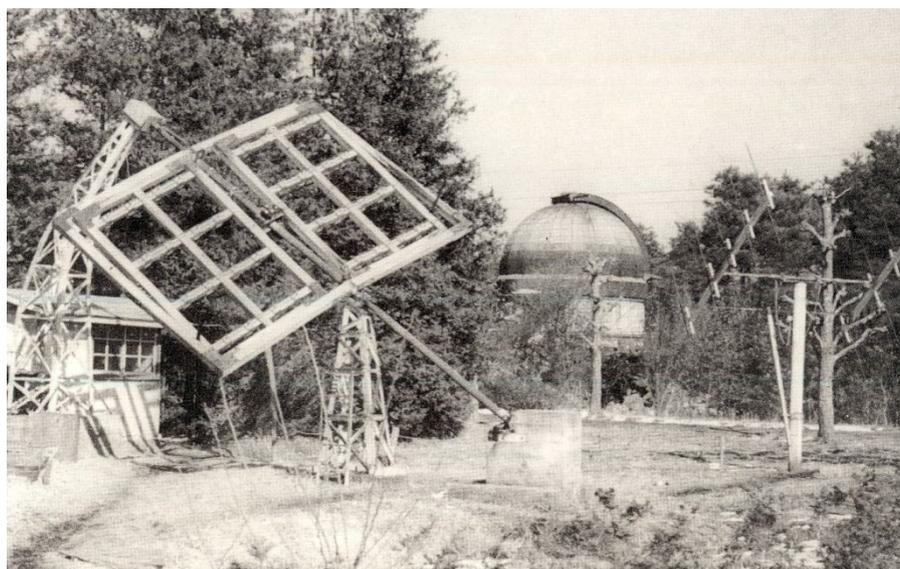


写真1 最初の頃の電波望遠鏡

写真1の電波望遠鏡があった位置は、写真からも分かるように、8吋（20cm）赤道儀望遠鏡を東に見る道路の北側にあった。この表現で場所を特定できるであろうが、現在の南棟（総合情報棟）が立っている場所にあったのである。現在の南棟の場所には東京天文台本館(二)という分光部が入った平屋の比較的大きな建物(248平米)があった。この建物にいた主な方々は、畑中武夫、大沢清輝、末元善三郎、斉藤国治氏らである。畑中武夫氏は日本の電波天文の始祖のような方である。

写真1の電波望遠鏡は、野辺山宇宙電波観測所で御子柴廣氏の手によって復元展示されており（写真2）、太陽電波を受信さえしている。

その後、東京天文台における電波天文グループの拠点はゴーチエ子午環の南西部一帯に移り、その一帯は「ノイズ」と呼ばれていた。「ノイズ」と呼ばれた理由は、当然のことながら宇宙からの電波が電波通信の「雑音」すなわち「ノイズ」として発見されたからであるが、そのころ電波のグループに口数の多い、大きな声を出す御仁がいたことにもよったのである。このように書けばその御仁がすぐ誰かが分かるような存在であった。

その電波の拠点には、今では考えられないみすばらしい木造の実験室兼研究室があり、その前には池があった。その池のほとりにしだれ桜があった。このしだれ桜については、

筆者と同年の沢正樹氏が定年のあいさつに「ノイズの桜」と題した文を書いており、そのしだれ桜は台長室の西の中庭に移植され、毎春、定年退職者を見送っているのである。



写真2 野辺山に復元された初期の電波望遠鏡

この「ノイズ」の象徴的な電波望遠鏡が 10m パラボラ太陽電波赤道儀望遠鏡であった。その姿は美しく、優美であったが（写真3）、太陽電波観測が野辺山に移って、いつの間にか危険だということで倒されてしまった。



写真3 「ノイズ」にあった 10m パラボラ太陽電波望遠鏡とその周辺の干渉計

つい2~3か月前であったと思うが、ALMAプロジェクトを進めた電波天文の石黒正人名誉教授が天文学の歴史について本を書こうとしている外国人を連れて来て、日本の電波天文の拠点であった場所を案内してほしいと言われ、この「ノイズ」一帯を案内したことがあった。石黒さんは、この「ノイズ」辺りに施設があったころには東京天文台にいなかった人であるが、この辺りが日本における電波天文学発祥の拠点であったという看板を立てるように勧められたのである。

2012年4月から国立天文台のガイドツアーコースを、測地学関連遺跡を含めた領域に拡大する際、この「ノイズ」一帯も案内する箇所として加えることにして、この場所が日本の電波天文の拠点であったことを示す案内看板を設置した（写真4）。



写真4 10m パラボラ太陽電波赤道儀望遠鏡跡に立った看板

近い将来、写真3に写っている8素子の干渉計の1つのお皿（パラボラアンテナ）が見学の1.2m パラボラ太陽電波赤道儀望遠鏡となって三鷹に里帰りし、この看板の右手に設置される予定である。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)